

# 「ユダヤ哲学」の核心としての無限判断

— ゴルディーン『無限判断の理論への探求』における  
その根拠と問題

馬場智一

## 序

本稿はラトヴィア出身のユダヤ人哲学者ヤコヴ・ゴルディーン (Jacob [Jakob] Gordin 1896-1947)<sup>(1)</sup>がベルリンのユダヤ教学アカデミー在籍中に出版した博士論文、『無限判断の理論への探求』(1929年刊、以下『無限判断』と略記)<sup>(2)</sup>で展開した無限判断の理論を、彼が構想していた「ユ

---

(1) Jacob [Jakob] Gordin のカタカタ表記については、これまでフランス語読みの「ジャコブ・ゴルダン」を中心にドイツ語読みの「ヤーコプ・ゴルディーン」を並記してきた。しかし、夫人ラシエルのインタビューでは「ゴルディーン」と発音され、またフランス亡命直後は名前が「Gordine」と表記されることもあった。ゆえに本来は「ゴルディーン」と発音するものと思われる。また、ロシア支配下にあったラトヴィア出身のゴルディーンは、ロシア語を第一言語としていた。Jacob についてもロシア語風に「ヤコヴ」と発音するものと思われる。夫人のインタビューについては以下のドキュメンタリー映画を参照。Emile Weiss, *Destins, Valeurs, Transmissions. Rachel & Jacob Gordin*, Michkan World Productions, 2002。なお、名前の綴りに関しては、ドイツで出版された博士論文では Jakob、フランスで出版されたものに関してはフランス語風の綴りである Jacob に統一されている。

(2) *Untersuchungen zur Theorie des unendlichen Urteil*, Akademie Verlag, Berlin, 1929. 引用箇所は (TU 引用ページ) によって示す。

「ユダヤ哲学」の歴史を記述するための核になるものとして解釈し、その可能性と問題点を検討する。

全イスラエル同盟でゴルディーンと同僚だった哲学者、エマニュエル・レヴィナス（1906-1995）は、その著作活動のかなり早い段階でゴルディーンから中世ユダヤ教の哲学、とりわけマイモニデスについての知識を得ていたと思われる。レヴィナスの倫理思想における議論は、ゴルディーンのマイモニデス論とつきあわせるならば、中世最大のユダヤ哲学者に忠実であることがよく分かる<sup>(3)</sup>。ゴルディーンのマイモニデス解釈はしかし、彼が研究したヘルマン・コーヘンのマイモニデス解釈の流れを組むものである。コーヘン、ゴルディーン、レヴィナスのマイモニデス解釈は、いわば倫理的な解釈であり、倫理と同時に政治哲学的な側面を見逃さなかったレオ・シュトラウスの解釈とは対照的である<sup>(4)</sup>。本稿では倫理的な解釈のうちの一例としてゴルディーンの解釈を検討する。

マイモニデスの『迷える者への導き』の倫理的な解釈の核心は二つある。一つは神と人間との存在論的な次元での隔絶であり、もう一つは神からの倫理的な呼びかけである。神を創造神ととらえる一神教の立場に立つ以上、神と被造物である人間は、隔絶しているとはいえ全く無関係ではない。その関係性は存在の次元ではなく、倫理のうちにある。したがって存在論的な隔絶と倫理的な関係性は、同じ事柄の二つの側面に他ならない。

この二つの核は、マイモニデスの哲学において神の属性理論によって表現されている。マイモニデスは存在論的な隔絶という発想に基づいて、ほとんどの属性を神の属性として認めない。認められるのは「欠如の否定」

---

(3) この点については以下の拙論を参照。「ユダヤ哲学から西洋哲学批判へ——ジャコブ・ゴルダンと初期レヴィナス」、『哲学』第63号、2012年、181-195頁。

(4) シュトラウスの解釈については以下の拙論を参照。「哲学と法——初期レオ・シュトラウスによるマイモニデス解釈の基礎とその関心」、『思想』(第1014号)、岩波書店、2008年、141-155頁。

だけである。神がその本性上持ちえない属性がここでの「欠如」にあたり、この欠如を「持っていない」、つまり「欠如していない」という時、神を主語とした述定は許される。これが神と被造物の存在論的な隔絶という立場の、属性理論による表現である。もう一つの核、積極的な倫理的関係は、諸々の属性のうち唯一肯定表現が許される「行為属性」によって表現されている。一つの主語が複数の行為を順番に行ったとしても、それは主語の複数性を含意することはない、すなわち神の唯一性を損なうことはない。それ故、行為属性は肯定的述定が許容されるのである。また、神の行為は、人間に対して示された理想的な規範であり、人間はこの理想的な規範に、自らの倫理的な行為を通じてできるだけ近づかなければならない。倫理的解釈においては、神と人間との関係は、こうした規範とそれを実現する義務という関係によってのみ理解される。

本稿の主題である「無限判断」は一つ目の核に関連する。一つ目の核は「欠如の否定」という論理であるが、「無限判断」はその歴史的展開を見ると「欠如の否定」を一つのヴァリエーションとして含む、より一般的な論理である。パリに来てから残した論文とベルリン時代に公刊した博士論文を合わせて読むと、ゴルディーンがこの無限判断を「ユダヤ哲学」の方法論的な核として認識していたように思われるのだが、そもそもこの「無限判断」とはいかなる概念なのだろうか。そしてそれはどのように「ユダヤ哲学」を内に含むのか。

この問いに答える前に、彼の「ユダヤ哲学」という構想について、すでに我々が明らかにした内容を踏まえつつ簡単に確認しておきたい。パリ移住（1933年）後ゴルディーンは、当時の哲学アカデミズムにおいて一定の影響力を誇っていたエチエンヌ・ジルソンの読書ノートを大量に残しており、ジルソンの「キリスト教」哲学という発想を継承しつつ、それを「ユダヤ教」にも拡大しようとしている。「マイモニデスの現代性」（1934年）では、ジルソンの名を挙げながら、「中世ユダヤ哲学」（*philosophie juive médiévale*）の本質を取り出すのが、いまやユダヤ教の哲学史家の役

割とされている<sup>(5)</sup>。一方、論文後半の注では、トマス・アクィナスの存在の類比は、カントやヘーゲルにもある仕方で継承された、哲学の「キリスト教的な方向性」(orientation chrétienne)の特徴であり、他方、マイモニデスが体現する欠如の否定の論理は、現代ではコーヘンに受け継がれる「ユダヤ的方向性」(orientation juive)の特徴であるとされる<sup>(6)</sup>。この二箇所から、1934年の段階で西洋哲学のなかにキリスト教的な方向性とユダヤ教的な方向性の二つの流れを見定め、哲學家としての自らの仕事を、後者つまり「ユダヤ哲学」の本質とその歴史の変遷の解明と捉えていることが読み取れる。

二十世紀前半のフランス哲学史のエピソードとしてはよく知られていることだが、ジルソンによる「キリスト教哲学」という発想は当時すでに、エミール・ブレイエからの反論を受けており、この概念の有効性は論争的となっていた。ゴルディーンもまたこうした事情を知らない訳ではないであろう。しかし、それでもこのように「キリスト教哲学」から刺戟を受けた「ユダヤ哲学」という哲学史上のカテゴリーを確保し、上述の構想を垣間見せている。この構想は、哲學者自身が51歳で亡くなったため結局実現しなかった。では、実現しなかったゆえに、それはつまるところ、根拠のない単なる夢想到過ぎなかったのだろうか。いや、ゴルディーンは何の根拠もなくこのような哲学史上の大胆な見立てを短い注のなかに詰め込んだのではない。その根拠は、むしろパリ以前の彼の著作、すなわち『無

---

(5) «Actualité de Maimonide», *Cahiers juifs*, n° 10, juin-juillet 1934, p. 9.

(6) Jacob Gordin, *Écrits: Le renouveau de la pensée juive en France*, Albin Michel, 1995, p. 143. この哲学的見立てが惹起する検討課題については以下の拙論に列挙しておいた。«L'actualité de Maimonide chez Jacob Gordin: Notes de lectures pour l'étude de la genèse de la vision de l'histoire de la philosophie occidentale chez le jeune Levinas», 『人文・自然研究』第5号、一橋大学大学教育研究開発センター、2011年3月、pp. 380-404. (<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/19020/2/jinbun0000503800.pdf>)

無限判断』のなかに見出だすことができる。

なお、「ユダヤ哲学」というカテゴリーの妥当性については、最低限の検討が必要であるが<sup>(7)</sup>、本稿の目的は、あくまでゴルディーンの構想していた「ユダヤ哲学」を再構成することにある<sup>(8)</sup>。ベルリンでゴルディーンが所属していたユダヤ教学アカデミーの上司にあたる、ユリウス・グットマンの『ユダヤ教の哲学』(*Die Philosophie des Judentums*)のような、歴史的に幅広い概観を提供する仕事に比べると、すくなくとも『無限判断』のなかを読みとれるゴルディーンの「ユダヤ哲学」構想は、マイモニデスとコーヘンという非常に限定された範囲を対象にしている。この構想は上述のジルソン（やマリタンなどの新トマス主義者ら）が存在の類比を「キリスト教哲学」(*philosophie chrétienne*)の核心として捉えていた事にたしかに対応している。しかしゴルディーンの場合、無限判断の論理そのものはユダヤ哲学を越えて見出される。この論理を哲学の核心に据え、体系として打ち立てたのがマイモニデスとコーヘンであるが、だからといって、無限判断の論理を含むのが「ユダヤ教」と直接関連する哲学だけとは限らない。

ゴルディーンが「マイモニデスの現代性」で示した上述の大胆な哲学史的見立ての根拠は、『無限判断』のなかに含まれるわけだが、以下、次の三つの点を順に追いながらそれを明らかにする。(1) 無限判断の西洋哲学史上の変遷。(2) 欠如の否定と存在の類比の対立。(3) 根源の弁証法と体

---

(7) さしあたり、最も簡潔なものとしてはトリガノの論文を参照。Cf. Schmu-el Trigano, «Levinas et le projet de la philosophie juive», in *Rue Descartes—Emmanuel Levinas*, PUF, 1998, pp. 141-164.

(8) 予め誤解を回避するために断っておくが、「ユダヤ哲学」という呼称は、「ユダヤ系の出自」をもつ思想家（例えばベルグソン、フッサール、デリダ、アドルノ等々）の哲学をひとまとめに名指そうとするのではない。またこの呼称により「哲学」を「ユダヤ教化」したり、「ユダヤ教」を「哲学」化しようとするものではない。

系の弁証法の対立.

(2) と (3) を通じて欠如の否定 (マイモニデス) と根源の弁証法 (コーヘン) が「無限判断」の二つの形態であること, 体系の弁証法が存在の類比のヴァリエントであることを示し, 最後にこの構想の可能性と問題について検討したい.

## 1. 無限判断の西洋哲学史上の変遷

『無限判断』は三部から構成される. 第一部は無限判断の歴史の変遷を概観する. 無限判断というテーマはユダヤ哲学にかぎらず, 古代ギリシアからみられる. アナクシマンドロスのト・アペイロンなどがその先駆であり, ソクラテスではいわゆる「無知の知」が, プラトンでは「μη ὄν」や「οὐκ ὄν」, そのヴァリエントである「存在の彼方 (ἐπεκείνα τῆς οὐσίας)」としての善のアイデア, あるいは無根拠 (ἀνυπόθετον) がこれに対応している (TU 2). それゆえ無限判断の論理はユダヤ哲学以前から存在している.

しかしゴルディーンは第二部終盤に付された, 三頁近くに渡る長大な注で次のように云う. 「無限判断の固有な性質はマイモニデスの用語『欠如の否定』, あるいはドゥンス・スコトゥスの用語『欠如の欠如』によって特徴づけられる。」 (TU 81)

マイモニデスの欠如の否定は, コーヘン自身が「マイモニデス倫理の特徴」で論じているように, プラトンの善のアイデアをめぐる思考を継承している. 善のアイデアとしての神の行為は「欠如の否定」としてしか表現できない. ここに無限判断の論理の一つのユダヤ的な結晶をみることができる. そしてコーヘンはその思考を受け継いでいる<sup>(9)</sup>. この限りでマイモニデス

---

(9) Hermann Cohen, “Charakteristik Ethik Maimunis”, in *Werke, Bd. 15, Kleinere Schriften IV 1907-1912*, Bearbeitet und eingeleitet von Hartwig Wiedebach, Georg Olms Verlag, Hildesheim/Zürich/New York, 2009,

とコーヘンの連続性、いふなれば「ユダヤ哲学」の論理の一貫性が見出させる。しかしここにはスコトゥスにおける「欠如の欠如」も含まれており、既に述べたように、その意味で「ユダヤ哲学」は、ユダヤ教徒以外の哲学者に開かれたカテゴリーである。しかし、欠如の否定と欠如の欠如が同一の論理として見なし得るかどうかが、ゴルディーンは博論のなかでは全く触れていない。さらにこれ以降、ゴルディーンがスコトゥスを論じることはなくなる。

この点は「ユダヤ哲学」構想のなかに謎として残るが、結論で再び触れることにしよう。さしあたりは、「ユダヤ哲学」が開かれたものであり、その論理の核心はギリシア哲学のはじめから存在していたことを確認しておきたい。

## 2. 欠如の否定と存在の類比

それでは、無限判断の固有の性質を特徴づける「欠如の否定」とはどのようなものなのかをくわしく見てみたい<sup>(10)</sup>。まずは、「キリスト教的方向性」の本質とされていた、「存在の類比」との対比から理解してみよう。

神の属性に関してマイモニデスは五つの種類を区別したが<sup>s(11)</sup>、そのう

---

p. 176. アリストテレス主義者という通常理解とは裏腹にマイモニデスがプラトンから影響を受けているというコーヘンのある種の直観は、若きレオ・シュトラウスによって文献学的に裏付けられるが、同時にコーヘンの解釈の限界も指摘される。Cf. “Cohen und Maimuni”, in Leo Strauss, *Gesammelte Schriften, Bd. 2: Philosophie und Gesetz-Frühe Schriften*, unter Mitwirkung von Wiebke Meier, hrsg von Heinrich Meier, J. B. Metzler, 1997. « Cohen et Maimonide », tr. fr. par Colline Pelluchon, in *Revue de Métaphysique et de Morale*, avril-juin, 203, n°2, pp. 233-275.

(10) 紙幅の都合上、以下ではテクニカルな議論に立ち入らず必要な要素のみピックアップする。

(11) Maimonide, *Le guide des égarés*, tr. par S. Munk, nouvelle édition, Maison-

ち行為属性については神を「限定」することはない故に認めている。その他の四種については、神の無限なる本質を「限定」してしまうため認めない。それでも聖書では神に様々な属性が与えられている。無限でありかつ唯一の神に、有限の名が複数与えられている。この矛盾をどのように調停できるのだろうか。神学的前提から導きだされるこの哲学的な問いに答えるのが、「欠如の否定」である<sup>(12)</sup>。これにより、神に帰されるあらゆる属性は、ある欠如態を表す属性の否定であると捉えられることになる。「永遠」という属性を神に帰したいのであれば、「永遠」を「可死的であることの否定」（つまり「可死的ではない」と解さなければならない。「可死的である」という属性を否定することで、神の本質をある肯定的な属性によって限定することは避けられる。

神の属性を否定表現によってのみ表現する方法は、マイモニデスの独創という訳ではない。ディオニュシオス偽書以来、「否定を通じて」（via negationis）という否定神学の方法は、キリスト教神学には定着していた。マイモニデスはこの伝統をさらに精巧に発展させたといえる。

中世ユダヤ哲学者のこの特異な論理に対して、キリスト教的方向性を代表する存在の類比はどのような特徴を持つのであろうか。アヴィタル・ヴォールマンの詳細な注釈によればトマス・アクィナスにとって『神学大全』以前の著作から、マイモニデスは主たる理論的な対話者であり、名前こそあげていないものの、ある種の問題に関してトマスがマイモニデスを想定していることは明らかである<sup>(13)</sup>。

---

neuve et Larose, 2003. § 52. 1. 定義 2. 定義の一部 3. 実体と本質以外のなにか（偶有性＝質） 4. 何か別のものとの関係 5. 行為

(12) マイモニデスはアリストテレスにおける七種の欠如態のうち（Aristote, *Métaphysique*, Livre 4, 1022b 22, tr. par Marie-Paule Duminil et Annick Jaulin, GF Flammarion, 2008, p. 212.）, 「植物は目を欠いている」という、主語が本性上もつことのできないものの欠如を「欠如の否定」に適用している。Maïmonide, op. cit., I, pp. 68-69.

とりわけ、被造物と神の関係に関しては、神と被造物の間の無限の隔たりを強調するマイモニデスから、トマスは袂を分かつことになる。マイモニデスが神になんらかの肯定的属性を帰することを拒否するとき、マイモニデスは、この属性が人間の属性であり、人間の属性を神に帰しているということを前提にしている。マイモニデスの立場からすれば、人間の属性を神に帰することはできない、なぜなら被造物と神の間にはいかなる相似もない、すなわち人間と神は無限に隔たっているからである。それゆえ、被造物と神の間になんらかの類比的な関係を想定することはできない。

ところがトマスはこの前提を根底から覆す。すなわち人間の「善さ」はそもそも神に由来するのであり、人間の善さは神の完全な善さに比べて劣るとはいえ、原因と結果という関係がある以上、そこには比例関係が存在する<sup>(14)</sup>。これが、トマスの注釈者カイエタヌスが後に *analogia proportionalitatis* と呼ぶことになる存在の類比の論理である<sup>(15)</sup>。こうして神になんらかの属性を帰することが可能になる。

人間の属性は神に由来するとしたが、それは最終的には神のどのような属性に由来するのか。人間の「善さ」は神の無限の「善さ」に由来するが、他の属性はどうだろうか。もし他の属性も神に由来するのなら、神には複数の属性が備わるのであろうか。属性の複数性は神の一性を否定することになる。この神学上の困難を解決するのが、ジルソンが云うところの「出

---

(13) Avital Wohlman, *Thomas d'Aquin et Maimonide—un dialogue exemplaire*, Cerf, 1988, pp. 144-149. Cf. I Sent., d. 35, q. 1, a. 1. *De Veritate*, q. 2, a. 1. II *Contra Gentiles*, c. 44.

(14) より詳しくは Thomas d'Aquin, *Somme théologique*, tr. par Roguet Aimon-Marie, Cerfs, 1900, t. I, q. 13, art. 5.

(15) P. Aubenque, «Sur la naissance de la doctrine pseudo-aristotélicienne de l'analogie de l'être», *Les études philosophiques*, n°3 (juillet-décembre), 1989, p. 292. アリストテレスにおけるアナロギアが、古代末期の新プラトン主義によるアリストテレス注解を経て、トマスの存在の類比へといかに変化したかについてはこの論文が詳しい。

エジプト記の形而上学」である<sup>(16)</sup>。自らを溢れ出ることを本質とする存在としての神は、被造物に自らの存在を与える<sup>(17)</sup>。「存在」(Esse)こそ、あらゆる存在者が与る究極の存在である。プラトンの「融即」(metexis)とはまた別の意味での「存在」への「融即」(participatio)がここに認められる。「善さ」や他の属性もまたこの「存在」に由来するものであり、神の一性はこうして保持される。

このようなトマスの立場は、善のアイデアを存在(ウーシア)の彼方としたプラトンを大きく乗り越えるものである。なぜなら、トマスは善のアイデアのさらに彼方に、個々のアイデアの源となる「存在」(エッセ)を見出したからである。ジルソンは『中世哲学の精神』のなかで、こうしたトマスの見解を高く評価し、「プラトン主義に深く貫かれている」ディオニュシオス偽書の思想を乗り越えるものとみている<sup>(18)</sup>。

ゴルディーンはおそらくフランスに来てから、ジルソンの『中世哲学の精神』の200頁近い読書ノートを残している。全イスラエル同盟図書館に所蔵されたゴルディーン・アーカイヴには、彼の読書ノートが幾つも残されているが、200頁にも渡るものは他に例がない<sup>(19)</sup>。『中世哲学の精神』を吸収しようとするゴルディーンの熱意は特筆すべきものだが、この熱意は一体何処から来るのだろうか。上述のように、「ユダヤ哲学」の原理となる無限判断についての見解はベルリン時代の博論で確立している。しかし他方で、それと比較対照されるべき「キリスト教哲学」なる発想に、お

---

(16) Étienne Gilson, *L'esprit de la philosophie médiévale* (1932), Deuxième édition revue, J. Vrin, 1989, p. 95.

(17) Gilson, op. cit., p. 96. «est diffusivum sui et communicativum».

(18) Ibid., p. 94.

(19) 所蔵された文書の詳しいリストは以下の同図書館ホームページで参照できる。 [http://www.aiu.org/bibli/index.php?option=com\\_content&view=article&id=117%3Aarachel-et-jacob-gordin&catid=24%3Aarchives-privees&Itemid=6](http://www.aiu.org/bibli/index.php?option=com_content&view=article&id=117%3Aarachel-et-jacob-gordin&catid=24%3Aarchives-privees&Itemid=6) (最終閲覧日 2013年9月23日)

そらくベルリン時代のゴルディーンはまだ触れていなかったのではないだろうか。ジルソンによる「存在の類比」論は、この比較対照の手懸かりを初めて与えてくれたものだったと思われる。ゴルディーンの熱意はおそらくこのことに由来する。

### 3. 根源の弁証法と体系の弁証法

マイモニデスの欠如の否定という方法論においてその本質を露にした無限判断は、近代哲学ではつねに不十分な仕方では扱われなかった。『無限判断』でゴルディーンはカント、マイモン、ヘーゲルを取り上げ、彼らが各々の仕方では無限判断の問題に接近しつつも、結局のところ捉え損なっていると論ずる。上述の「マイモニデスの現代性」の注で著者は、近代におけるキリスト教的方向性、つまり存在の類比の事例として、カントにおける「象徴的擬人論」、そして「ヘーゲル弁証法」を挙げている。ところが『無限判断』では、カントの位置づけは遥かに微妙であり、超越論的構想力や知覚の予期が独自の仕方では無限判断の核心に触れていることを詳細に論じている (TU 6-14)<sup>(20)</sup>。他方ヘーゲルに関しては、評価は変化していないといってよいだろう。『無限判断』の後半には、なぜヘーゲル弁証法が存在の類比のヴァリエーションであるのかを理解するための鍵といえるものがある。以下、この議論を見てみたい。

先ほど存在の類比における存在への融即について触れた。存在の類比という方法は、神と被造物の間に埋めようのない差異を認めながらもその間に、原因と結果の類比性を認めようとする。ジルソンと同時期の新トマス主義者ジャック・マリタンの主著のタイトル (1935年出版) を援用するならば、「統一するために区別する」(*distinguer pour unir*) のであり<sup>(21)</sup>、

---

(20) 主旨とは逸れるので扱うことができないが、同年に出版されたハイデガーの『カントと形而上学の問題』とも触れ合う論点が含まれている。

区別には統一への指向が先行している。これと同じ指向がヘーゲルにも見られるのである。

ゴルディーンは博論の補遺でコーヘンの根源の弁証法とヘーゲルの体系の弁証法を比較している。その際、しきりに強調しているのは、後者がもつ「一元化作用」(Unilateralisation)である。弁証法の一元化作用が前提とするのは、一元化される二つの項であり、それぞれが単にばらばら(disparat)なのではなくどこかで出合うことである。弁証法には二つの項の出遭いが必要であり、二つの項は一元化作用をうける。こうした弁証法のプロセスを、イエナ期のヘーゲルは「類比(Proportion)」という用語によって説明しており、これがのちの「弁証法的方法」へと変貌を遂げる(TU 157)。

このようにゴルディーンは、ヘーゲル思想が「類比」から「弁証法」へと連続的に発展していったことを想定している。実は、この立論を支えるのは注で参照されているローゼンクランツの『ヘーゲル伝』(1844)であるが<sup>(22)</sup>、ゴルディーンは、このイエナ期の類比がトマスの存在の類比に由来するものなのかどうか、そこまでは検証していない。確かにイエナ体系草稿にはProportionの語が現れる。「このもの」という「特殊」の実相が「普遍」へと受け入れられるが、特殊は普遍であるという実相を表現するのがProportionなのである<sup>(23)</sup>。果たしてヘーゲルは存在の類比から、弁証法の元となるこの発想を受容したのだろうか。これに答えるには慎重な検討を要するが、少なくともゴルディーンがなぜあのような大胆な見立てをしたのかは、Proportionという語がもつ一元化の作用から理解する

---

(21) Jacques Maritain, *Distinguer pour unir ou les degrés du savoir*, Desclée de Brouwer, 1935.

(22) Rosenkranz, *Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben* (1844), Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1988, S. 109

(23) Hegel, *Jenaer Systementwürfe II, Logik, Metaphysik, Naturphilosophie*, Rolf-Peter Horstmann (éd.), Felix Meiner, Hambourg, 1982, p. 112.

ことができる。

この一元化を旨とする体系の弁証法に対して、ユダヤ的方向性を代表するのがコーヘンの根源の弁証法である。実のところ、無限判断の様々な変遷のうち、その固有の特徴を最も際立った形で示しているのは、根源の弁証法に他ならない。コーヘンの哲学はその意味で無限判断の論理の一つの到達点である。その本質は「根源における産出」、「産出」と「産物」の相互関係による「無限化の方法」(Methode der Verunendlichung)にある。ところで、我々の論述はゴルディーンに従って、西洋哲学のキリスト教的方向性とユダヤ的方向性を際立って異なる二つの水脈として論じてきた。これまでの論述では二つの方向性が「対立」しているという印象が生じたかもしれない。ところが『無限判断』におけるコーヘンとヘーゲルの突き合わせを検討してゆくと、両者は「対立」しているというよりも、むしろ根源の弁証法が体系の弁証法の可能性の条件を明らかにするものであるのだ。

ゴルディーンはヘーゲル弁証法の運動を記述しながら、そこに一つの矛盾を見出だす。体系の弁証法は、ある項と別の項の、体系全体を通じた(ある種の類比的)同等性に基づき、一方の他方に対する優位を否定しようとする。体系全体を前にして、二つの項は完全に同等である。しかし他方で、弁証法の運動が生じるには、体系を通じてどちらかの項が優位に立つことが必要である。すなわち、体系のなかのある項の地位が他の項の地位に対して異なったものとならなければならない。すなわち、体系を前にした諸項の同等性が否定され、差異が生まれなければ、そもそも諸々の項の同等的な関係の総体としての体系は不可能なのである。「これがヘーゲル弁証法の最終的な矛盾である(…)諸契機の全体性として、諸規定の体系として把握された理念の『絶対的先行性』(absolute Prius)は実現不可能である。体系への方向付けは不可避免的に袋小路に陥る」(TU 165)。あらゆるものが一つの理念へと止揚される弁証法によっては、その弁証法の運動を可能にする差異がどのように産出されるのかは明らかにならな

い<sup>(24)</sup>。この差異の産出を明らかにするのが根源の弁証法における産出である。

産出 (Erzeugung) とは、「SはPである」という形式によって表される認識判断の産出である。SはPによって規定される。産出とは規定された産物Sを生み出す規定行為を指す。無限判断とはあらゆる産出が前提とする純粹認識であり、この認識において「産出はそれ自体産物である」<sup>(25)</sup>。産出という規定行為それ自体は、実はある規定可能性 (Bestimmbarkeit) の領野の産物なのである。「人間」を規定するのであれば、たとえば「可死的である」や「二本足である」などの述語が可能であり、そのような可能な述語は無数にある。ある一つの述語によって規定された主語SをS<sup>1</sup>とすると、SにはS<sup>1</sup>, S<sup>2</sup>, S<sup>3</sup>…、S<sup>n</sup>というように無数のSがあり得る。仮にこの無数のS全体をS<sup>x</sup>とすると、ある任意のSは、あるPに対応するSであり、S<sup>x</sup>の部分的な現われに過ぎない<sup>(26)</sup>。

Xは無数であると述べたが、しかしこれは何の規定も受けていないのではない。Xはあくまでも「Sの」無数の連続であり、その限りでXに統一性を与えている (これを「同一性の思考法則」という)。

しかし仮にSが無数にあるのだとしたら、その同一性はどのように形成されるのであろうか。仮にSの規定可能領域に入る述語をAとすると、それは、あらかじめSの規定可能性の領域に入らない non-A を排除することによってである (これを「矛盾の思考法則」という)。たとえば「円

---

(24) もちろん、こうした論述が今日のヘーゲル研究に照らし合わせてどこまで妥当するのか、より詳細な検討を加えなければならないだろう。これについては別稿に譲りたい。

(25) TU 106 § 28 “Die Erzeugung selbst ist das Erzeugniss”. Cf. Hermann Cohen, *Werke Bd. 6, Logik der reinen Erkenntnis*, 4. Auflage, Georg Olms Verlag, Hildesheim / New York, 1997, p. 29, 53.

(26) 「〔ある〕Pにとっての規定可能性は〔ある〕Sという形で現われる」  
TU 48

は甘い」という判断においてP（「甘い」）は、S（「円」）の規定可能領域に本来存在しないのにも関わらずSの述語となっている。「甘い」は「円」を規定しうる述語ではないので、「円は甘い」という判断は不条理である。「甘い」は「円」にとってnon-Aである。PがSの規定可能領域に入らないということはPが「完全な共約不可能性」（völlige Inkommensurabilität, TU66）を成しているということである。このようなnon-Aの虚無化（Vernichtung）がAの出現（Auftauchen）を基礎づけている。

こうした否定性的一方で、別の否定性も存在する。たとえば「円」は「四角」ではない。この時「四角」という述語は「円」の規定可能領域に入らないが、同じく形を表す言葉であるゆえ、共約不可能ではない。円は四角とは別様にあるのであり、円は「四角ではない」。この時の否定のあり方（nicht-A）はnon-Aとは異なる。それは円の四角に対する別様性（Andersheit, TU 65）を表している。述語が同一のSへと向けられていること（Gerichtetheit, TU 59）という同一性の思考法則、および（虚無化と別様性という）二種類の否定性によりSの規定領域を外部と内部から確定する矛盾の思考法則、この二つの思考法則に則り、純粹思惟は規定行為を行う。あらゆる規定行為はこの二つの思考法則の産物であり、思考法則は判断のいわば超越論的条件である。

これがゴルディーンの提示するコーヘンの無限判断の核心である。無限判断はすでにプラトンにも見られると述べたが、「*οὐκ ὄν*」と「*μη ὄν*」は、それぞれ虚無化と別様性に対応する。欠如の否定はあらゆる肯定的述語の虚無化に基づき、別様性のみによって規定領域を確定しようとするマイモニデスの方法論である。これを受け継いで、（ヘーゲルとは異なった）体系として明確に確立したのがコーヘンである。

無限判断の論理は、体系の全体性を前提するのではなく、無限に広がる二つの無規定の領域を前提にしている。判断は、虚無化により排除される他性と別様性が前提にする他性によって成立している。これを無限判断は明らかにする。これがあらゆる判断の根源であり、「根源の判断」と呼ば

れるものだ。根源における他性の先行性を前提にするという点で、体系の弁証法とは異なり、かつ体系の弁証法の運動が前提にする差異の発生を基礎づけているのが根源の弁証法の特徴である。

## 結論

以上により、ゴルディーンがユダヤ哲学の核として考えていた「無限判断」の内実が明らかになった。これにより、マイモニデスにおけるその先駆的形態である欠如の否定とコーヘンにおける根源の弁証法の連続性を示すことができた。また、検討の余地はあるものの、少なくともその統一化作用の優位という点でトマスの存在の類比とヘーゲルの体系の弁証法の連続性もまた理解可能なものとなった。これによりゴルディーンが「マイモニデスの現代性」の注で示した大胆な哲学史構想の根拠が理解されよう。しかしゴルディーン自身がこの構想を詳細に実現することはなかった。他性の超越論的先行性を出発点にするという点で、「ユダヤ哲学」の核心である無限判断の論理は、ゴルディーンが読んでいながらも論じることができなかったローゼンツヴァイクや、同僚のレヴィナスといったギリシアとヘブライの両方の遺産を受け継いだ哲学者らにも（認識論的な色合いを差し引くという条件で）、見出すことができるのではないだろうか。

他方、ゴルディーンの「ユダヤ哲学」理解は、その核心である無限判断がマイモニデス以前から存在することを前提にしている以上、ユダヤ思想の遺産に与る哲学だけに限定されない論理である。「ユダヤ哲学」の内部に限っても同じ事が言える。たしかに一方で、マイモニデスの欠如の否定は、ヘブライ的な神の思想と不可分である。しかし、他方でゴルディーンが論じるコーヘンの『純粹認識の論理学』は、コーヘン晩年の宗教哲学への転回以前の著作であり、かならずしも宗教的遺産を前提にしていない。認識判断の超越論的条件という主題自体は、必要な修正を施せば、本稿で限定した「ユダヤ哲学」の枠組みを越えて、たとえば二十世紀では現象学

における所与性の議論にも拡大できるポテンシャルを有しているように思われる。また、ゴルディーン自身は無限判断の本質をとらえたものとしてスコトゥスの「欠如の欠如」をも挙げていた。スコトゥスとマイモニデスをどの程度まで共通の枠組みで論じる事ができるのか、先行研究を踏まえた正確な調査が必要であろうが、ゴルディーンが残したこの課題は西洋哲学の歴史的な理解、さらには「内在」や「超越」といった、現代において哲学理解全般を強く規定している枠組み自体に一定の修正を要求するかもしれない。こうした諸々の作業を今後の課題として確認したところで、本稿を閉じることにしたい。